

「島」型教育に対する一考察

——愛媛県野忽那島小学校「シーサイド留学」調査報告——

山 田 知 子*

1. 関心の所在及び研究の意義

戦前から戦後にかけて、わが国の「地域社会」・「家族」をめぐる環境は、大きな変貌を遂げてきた。特に1960年代以降の高度経済成長期における、高度な生産技術革新及び生産量の増大といった、いわゆる「産業化」が与えた影響は、経済・社会的変動（産業構造の変化…第一次産業の衰退と、第二・第三次産業の隆盛、都市人口の肥大化と農山漁村、離島地域の過疎化、マスメディアの発達、国民所得の向上、余暇時間の増大、女子の高学歴化、社会参加、キャリア化等）、並びに文化・価値体系の変化（「家」意識の衰退、民主友愛的家族観の浸透等）にまで、大きく広範囲に及んでいる。

さらに1970年代に入ってから、平均寿命の伸長と出生率の低下からもたらされた「高齢化社会」という用語が、「家族」を含むわが国の全体状況を説明するキーワードとなり、いうまでもなく、その人口構成比は各国に類を見ないほどのスピードで高齢化の度合いを強め、現在では超高齢化社会といわれる段階に突入している。

とりわけ「工業化」「産業化」の要求した労働力の

集中は、人口の地理的・職業的移動をもたらしたため、従来のわが国の典型的家族形態とも言うべき「直系世帯」はその解体を余儀なくされ、若者の人口流出の顕著な地域（中山間地域・離島等）では高齢者世帯の核家族化並びに独居化といった現象が顕在化している。

内地離島と全国における年齢構成比の推移は、表1に示すように、離島では全国より早いスピードで高齢化が進行していることがわかる。離島と全国との老年人口比率の開きは、昭和35年から平成12年（以後、昭和はS、平成はHと略記する）の推計データまで、4.2ポイント、3.7ポイント、5.7ポイント、8.6ポイント、9.9ポイント、11.5ポイントと上昇の一途をたどっている。またS45年からH2年までの20年間にみる老年人口比率（65歳以上）の推移は、全国の4.9ポイントに対し、離島では9.8ポイントと倍近い伸びを示している。H12年の推計では離島の老年人口比率は27.8%、生産年齢人口（14～64歳）は57.3%、つまり2人で1人の高齢者を支えていかなければいけないという驚異的な水準となる。しかし瀬戸内海には、老年人口比率が全国の14%をはるかに超え、既に40～50%となっているような島全体が老人ホーム化してい

表1 内地離島と全国における年齢構成比の推移

区分	年次	昭和35	昭和45	昭和55	平成2	平成7	平成12
		離島					
	0～14	37.6	28.8	22.3	18.4	16.2	14.8
	15～64	52.5	60.4	62.9	61.0	59.8	57.3
	65歳以上	9.9	10.8	14.8	20.6	24.0	27.8
全							
	0～14	30.2	24.0	23.5	18.2	—	—
	15～64	64.1	68.9	67.3	69.5	—	—
国	65歳以上	5.7	7.1	9.1	12.0	14.1	16.3

注) ①平成7年以降は厚生省人口問題研究所の推計による。

②『離島振興三十年史（上巻）』全国離島振興協作成。

表2 離島振興法指定離島の小・中学校設置状況

人口規模	昭和46年					昭和62年				
	島数	学校あり			小中なし	島数	学校あり			小中なし
		小中あり	小のみ	中のみ			小中あり	小のみ	中のみ	
20人以下	8	0	0	0	8	19	0	0	0	19
21～50人	11	5	0	0	6	19	1	3	0	15
51～100人	18	4	1	0	13	38	9	4	0	25
101～200人	48	15	16	0	17	36	16	11	④ 1	8
201～500人	54	31	17	① 1	5	50	27	19	⑤ 1	3
501～1,000人	36	24	12	0	0	38	28	9	0	⑥ 1
1,001～2,000人	41	33	7	0	② 1	30	23	7	0	0
2,001人以上	70	69	③ 1	0	0	56	56	0	0	0
計	286	181	54	1	50	286	160	53	2	71

注) 1. ①⑤は宮城県野々島(塩釜市), ②は長崎県佐世保黒島, ③は愛媛県九島(宇和島市), ④は長崎県日ノ島(若松町), ⑥は長崎県沖之島(伊王島町)。

2. 『離島老計年報』から作成。

る島々も多く点在している。そのような地域では、防災・教育・福祉など、地域社会の基礎的条件の維持が困難となる地域も多く現われている。

実際に島々を巡っていると、既に児童生徒数がなく廃校処分となった朽ちた校舎を目にすることもめずらしくない。離島の学校教育の現況は、S62年現在離島振興法指定有人島286島中215島に義務教育学校施設が設置され、小学校は本校458校、分校38校、計496校、児童数1校平均106人、教員1人当たりの児童数は12人となっている。S46年の状況と比較すると、学校数19.9%、児童数52.2%の減少であるという。また義務教育学校施設の分布を島の人口規模別にみると、表2の示すように、S49年と比較して、人口規模の小さい離島で無学校化が進んでいることが明らかであり、特に人口規模50人以下の島では顕著である。無学校の島数をS46年、14島と比較し、S62年には34島と、2.4倍になっている。学校が地域における文化継承・発展の拠点であるという認識に立てば、島内に次世代を担うべき子供達の姿がないという現象は、まさに島の存立そのものに関わる極めて深刻な問題であろう。

今日、多彩な島おこし対策が試みられている中、愛媛県野々島野々島小学校では、里親方式のもと、都会の小学生を一定期間受け入れ、地元生とともに学校生活を送らせる「瀬戸内シーサイド留学」をS63年に発足した。H5年現在では、全国の中で、島・海を舞台にした山村留学は、このみという極めて先駆的な意義深い実践例として、近隣の島に、高い関心をもた

れは始めている。本稿では、「瀬戸内シーサイド留学」の調査報告を基に、今後、次世代後継者問題が深刻化する離島の現状に、このような、いわゆる「島」型教育体系の検討がいかに必要であるかを考察してみた。

2. 野忽那島概要

愛媛県忽那諸島の東端に位置し、西は芋子瀬戸に対し、東は斎灘に面している。周囲5.7km、面積0.92km²で、忽那諸島有人島中、最も小さい島である。丘陵性の地形であるが、北西部に小湾があり、そのわずかな平坦地に1集落(160戸、約360人)が形成され、家屋が密集している。柑橘栽培と漁業が中心産業となるが、柑橘栽培の価格低迷、後継者不足、漁業の資源が減少するなど、農業・漁業を家業とする家では、経済的に伸び悩んでいる。そのうえ、他の就業機会の場もなく、若者流出により、就業者の高齢化・女性化傾向が見られる。町立診断所をもち、町立中島中央病院(忽那諸島最大の島)から、週一回出張診療を実施している。中学校はS39年に、中島中学校に統合し、生徒は全員、寄宿舎生活をしている。

人口の変化については、図1が示す通りである。高齢人口(65歳以上)比率は、S40年、16.6%に対し、H2年では、45.8%と約3倍近い伸びを示している。全国離島の平均高齢人口比率20.6%の2倍以上というまさに高齢化傾向の顕著な地域と言えよう。高齢人口と生産年齢人口(15～64歳)がほぼ同数であり、幼年人口(0～14歳)比率については、特にS40～45年の

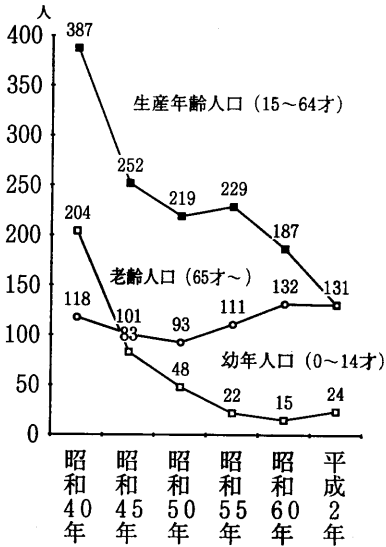


図1 野忽那島の幼年、生産、老齢人口の変化

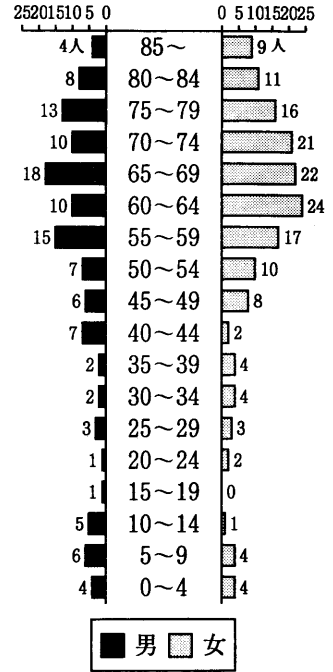


図2 野忽那島の人口ピラミッド

5年間に10%の減少が見られ、以降その傾向が続いている。しかしS63年に発足したシーサイド留学により少数ではあるが増加する結果となった。H2年の人口ピラミッドを描くと、図2のように逆ピラミッド形を描いている。

3. 瀬戸内シーサイド留学について

(1) 「瀬戸内シーサイド留学」制度概要にみる特色とその設立意義

a) 児童数の推移と設立まで

島の人口自体が急激な減少傾向にある中、野忽那小学校児童数も表3が示すように、S60年には10名にも満たないものとなり、学校存続の問題が顕在化していた。廃校・休校だけは避けたいという地元住民から

S61年に「野忽那小学校を支える会」が発足し、S62年「瀬戸内シーサイド留学」テストケースで1名の受け入れを試みる。S63年「瀬戸内シーサイド留学」を発足し、第一期生8名を受け入れ、H元年、留学実行委員会を設立し、以後留学生数の上昇により、児童数もH5年には、地元生8名、留学生11名の計19名に至っている。留学制度開始から現在までの留学生の出身地は、愛媛9名、兵庫7名、大阪5名、京都3名、広島・沖縄各2名、千葉・東京・奈良・岡山各1名というように広域に及んでいる。原則的には、1年間以上であるが、2~3年間更新する生徒も多いということであった。また、比較的、上級学年からの入学傾向も見られ、H5年では、6年生7名中、留学生6名、5年生3名中、留学生2名となっている。

表3 児童数の推移

年度	昭和25	30	35	40	45	50	55	60
人数	216	224	179	98	53	32	17	7
年度	61	62	63	平成元	2	3	4	5
人数	7	8	17(9)	13(5)	13(5)	15(9)	20(10)	19(11)

注) ()内は留学生数を示す。

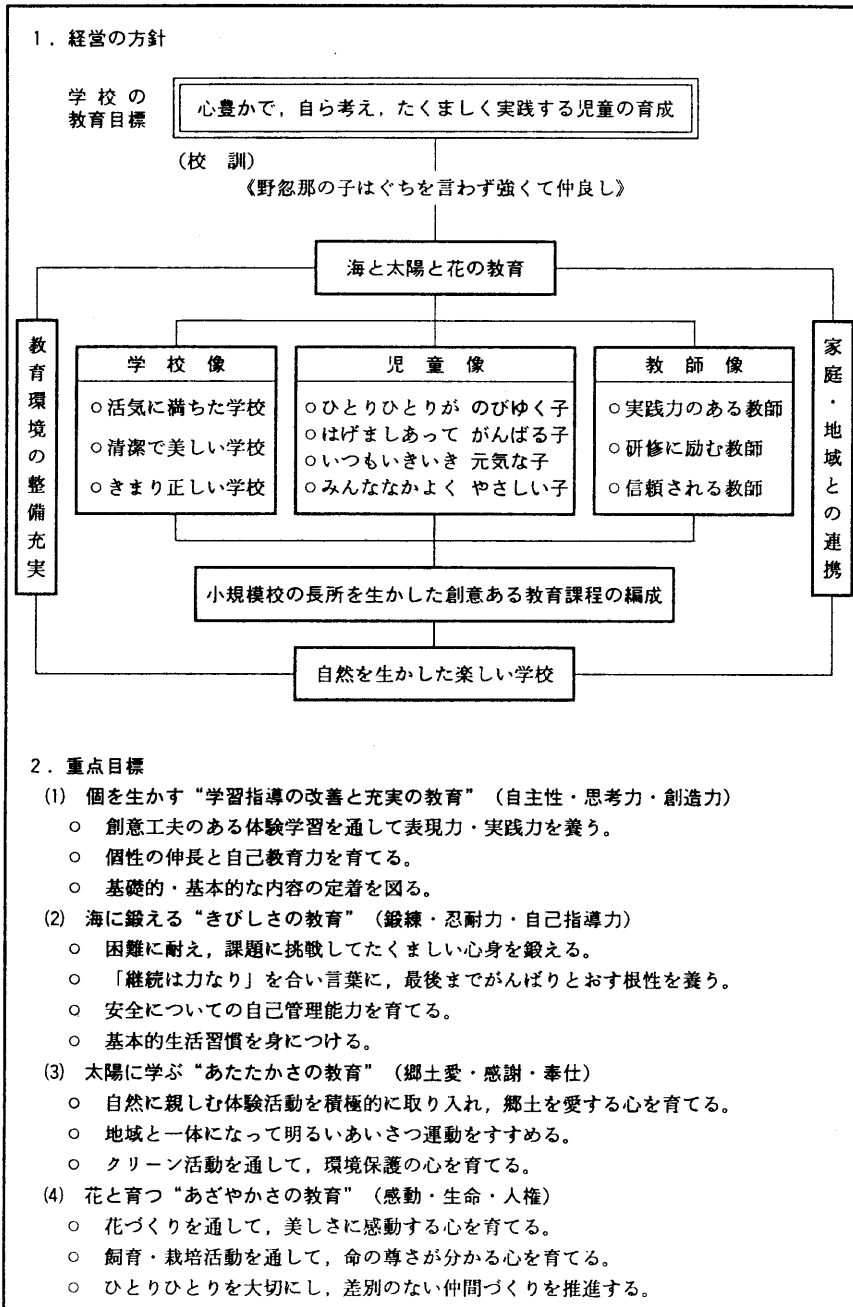


図3 教育計画

b) 運営

運営については、地元の保護者（里親会会員・小学校PTA会員）、各種団体代表者（地区総代・教育委員・公民館主事・消防分団長・農協理事・児童民生委員・人権擁護委員・老人クラブ会長・漁協組合長・警察協助員等）、学校（小学校長・教頭・教員）の3者で構成された実行委員会が行っており、まさに地域と学校が一体となつての取り組みである。

町から、年間40万円の補助金があるが、PR通信費や一日体験入学の諸雑費に当てられている。留学費に関わる必要経費としては、里親への委託料が月額48,000円（山村留学の平均は60,000円）、PTA会費・教材費・給食費等学校関係費用年額70,000円、留学生の小遣いは月額1,000円以内とされている。また、入学が決定する前に、一泊二日の体験入学を実施し、地引き網、カヌー、ボート、キャンプファイヤーといった島の自然の良さを知る企画もある。例年60名前後の親子の参加者のうち、留学意志のある10名前後の児童については面接し、その結果を実行委員行にかけ、留学生が決定する。

c) 目的

実施要領には、「この制度は、野忽那地区の恵まれた自然と、のびのびした環境の中で、個性を伸ばし、望ましい人間関係を育成することを目的に、留学を希望する保護者並びに児童に対して、野忽那地区の総意により、里親制度を設け、里親（留学生を受け入れる地元での保護者）の協力のもとに、児童の受け入れを図り、里親での生活はもとより、地域での生活を通して、人間としての基本的な生活習慣や望ましい行動様式を身につけさせる。あわせて過疎・過密の地域の交流を深め、野忽那地区教育の活性化を図る」とある。この主旨は図3の教育計画にも反映され、家庭・地域・学校との連携の中で、「自然」を軸にした小規模校の長所を生かした創意工夫ある学校生活が展開されている。

d) 里親

契約書の第6条には里親について「児童を家庭の一員として、家庭的雰囲気の中で接し、児童に対する深い理解と愛情をもって、児童が健全な身体及び豊かな情操と良識を持った人間になるよう、誠実に養育するものとする」といった条文が明記され、里親との人格的触れ合いと信頼関係を構築する工夫もみられる。例えば学校よりの諸連絡は原則として里親を優先し、成績表も里親に手渡される。学期末の個人懇談も、里親に出席を依頼する。また里ごころ（ホームシック）をおこさせない対策として、児童と保護者との連絡は、急用

以外は手紙で行うものとし（心がこもる、後に残る、勉強になるという意図を含め）、電話は必要以外、使用を禁止している。

e) 授業計画

表4が示すように、年間行事の中には、島巡り、島内清掃、水泳大会、ボート、カヌー、マラソン、魚釣り、みかんもぎ等、「その島らしさ」を活かした創意工夫のある体験学習、またお年寄り訪問、老人参観日等地域の高齢者との交流も組み込まれている。学年単

表4 平成5年度創意の時間年間計画

月	日	内 容
4	17	児童会（留学生を迎える集会計画・準備）
5	1	留学生を迎える集会②・委員会①
	15	ボート・カヌー／ローラースケート
	22	ペイント計画（班別）
	29	島めぐり
6	5	スポーツテスト・自転車教室
	19	さつまいも植え②・ペイント①
	26	児童会（七夕集会計画・準備）／委員会
7	3	額場海水浴場の清掃・ペイント①
	17	神社の清掃・ペイント①
	町内水泳大会・教育キャンプ	
9	4	運動会練習・敬老会の計画
	18	運動会練習
	25	運動会準備
10	2	神社の清掃・島内掃除
	16	児童会（釣り大会計画）・音楽会練習
	23	釣り大会
	30	いもほり・学級園の整備
11	6	児童会（児童会長選出・収穫祭計画）
	20	収穫祭
	27	音楽会練習
12	4	ゲーム大会・なわとび検定
	18	児童会（クリスマス・給食会計画）・奉仕作業
1	22	学芸会練習
	29	学芸会練習

2	5	学芸会練習
	12	学芸会・もちつき大会
	19	児童会（スポーツ大会計画）・委員会
	26	スポーツ大会
3	5	文集作り
	19	卒業式練習

その他、お年寄り訪問、老人参観日

位の教科学習を除いた、登下校、自由時間、給食、清掃、放課後時間は、全教職員、全生徒で行っている姿が見られる。

(2) 聴き取り調査から

a) 児童

「——おじさんやおばさんは、とても優しくいろんなお世話をしてくれます。晩ごはんには新鮮な魚を食べさせてくれます。本当は1年で沖縄に帰る予定だったんですが、野忽那小学校が楽しくて2年目を迎えています。沖縄の家では海でつりをしたことがありませんが、今ではいつもつりをすることができます。留学する前は、全然泳げませんでした。ここに来て、今年の夏には500メートルも泳げるようになりました。業間（休憩時間の意）には皿山に皆で登ります。ボートやカヌーをこぐのが上手になりました。またマラソンやサーキットトレーニングをして、持久力もつき、足も速くなりました。放課後には、1年生から6年生まで全員でソフトボールをしてとても楽しいです。——前の学校では、人数が多くしゃべる人がいて勉強に集中できなかつたり——野忽那小学校では人数が少ないので、分からないところやできないところを一つ一つ教えてくれます。前の学校の運動会は出場する回数があまりありませんでしたが、ここの学校では出番が多く、とても楽しいです。ここ野忽那で勉強したり遊んだりしたことは、僕の一生の思い出と宝になることと思います。（留学生5年生より）

地元生の多くは、「今までは友達が少なく、サッカーやソフトボールもできなかったけれど、留学生が来て遊べるようになって楽しい。都合の子供はおもしろい」と語ってくれた。

b) 保護者

「——家にいた時は我ままで根気が無く、勉強も投げやりなところが多かったが、島では里親さんの上手な手網さばきと先生方の温かい御指導により見違えるように頑張ることができるようになりました。——

一人一人の個性に合った手作りの教育に、本当の教育の原点を見せていただいたと思います。今、子供達に失われつつある子供らしさを培うことができたことは何にも優る子供の財産であると思います。スポーツ・絵画・学芸・音楽などの情操面において心ゆくまで堪能したようです。親にとりましても有意義な一年間でした。子供との距離をおいて、お互いを見直し、その特徴を再発見できたと思います。——」——「シーサイド留学のしおり」から——

c) 里親

「S60年頃は、生徒数は10人を割り、PTA会員数も5件ぐらいでした。島の子供は純朴で素直でいいんですが、積極性に欠け、集団的な活動が出来ないという悩みを持っていました。これが当時のPTAの課題だったのです。廃校にだけはしたくないと皆考えていたところ、たまたま教育新聞の山村留学に関する掲載記事にヒントを得、取りあえず即、取り組める方法として里親制度をつくり、シーサイド留学が誕生したんです。しかし里親を捜すのは大変な事でした。父さんが良いと言っても、実際、子供の食事づくりから育児など母さんの仕事ですから、まず母さん達の同意を求める必要があって、若いお母さん方に集まってもらいましたが、かなりの抵抗を示しました。また夫婦そろっている家庭であることも必要としました。子育てを既に終えられた夫婦にも引き受けてもらうことになりましたが、むしろ保護者は、いわゆる3世代とか、おじいさん、おばあさんの家庭を希望しているようです。都会の子供と、島の年寄りの食事の違いなども、当初はずいぶん心配しましたが、実際はそれほどの問題でもなかったようです。しかし都会の子供が初めて、ここに来た時は、「ビルがない!」といい、セミを初めて見たという子もいて、むしろ私達の方がびっくりしました。勉強面でも逆に、なかなか鋭い質問をされる時があるから、私達も普段から勉強していないという面もあります。ホームシックも、今の子供はあまり無いようで、むしろお母さんの子離れの方が難しいみたいです。それまでは、1週間のうち1日程度しか体が空いている時が無いくらい、習い事や塾通いで忙しかったせいか、ここに来てのびのびしています。私達が一時預りという気持ちで接していたら子供はなついてきません。自分の子供にするところから出発しないと。本気で叱り、ほめますよ。

1か月48,000円の委託料は、ほとんど食費です。実質、保護者の負担額は月額60,000円弱ぐらいでしょう。里親からは、小遣いはあげませんが、子供達は親からもらった月1,000円を、ここの島では、ほとんど

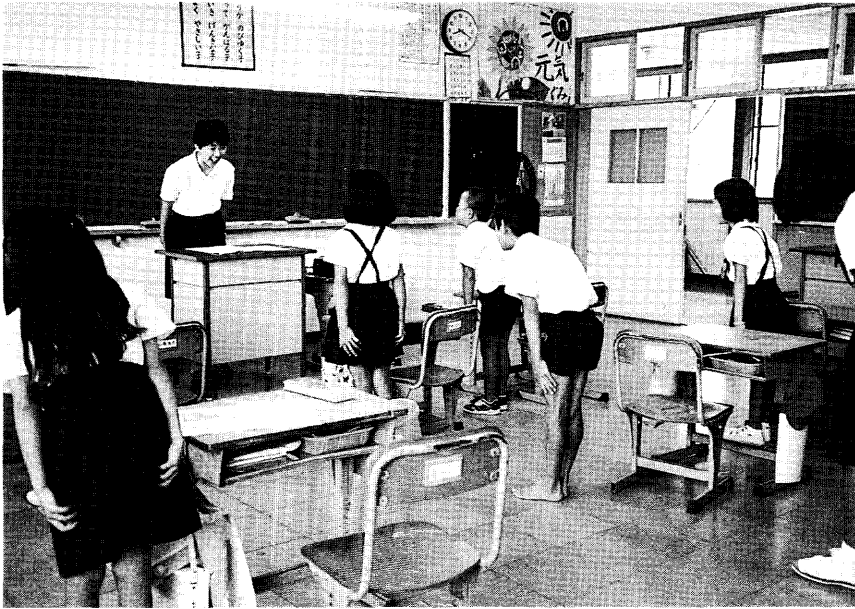


写真1 机の向きの違いで学年が異なるが、教室の中はいつも学年を越えて仲が良い。

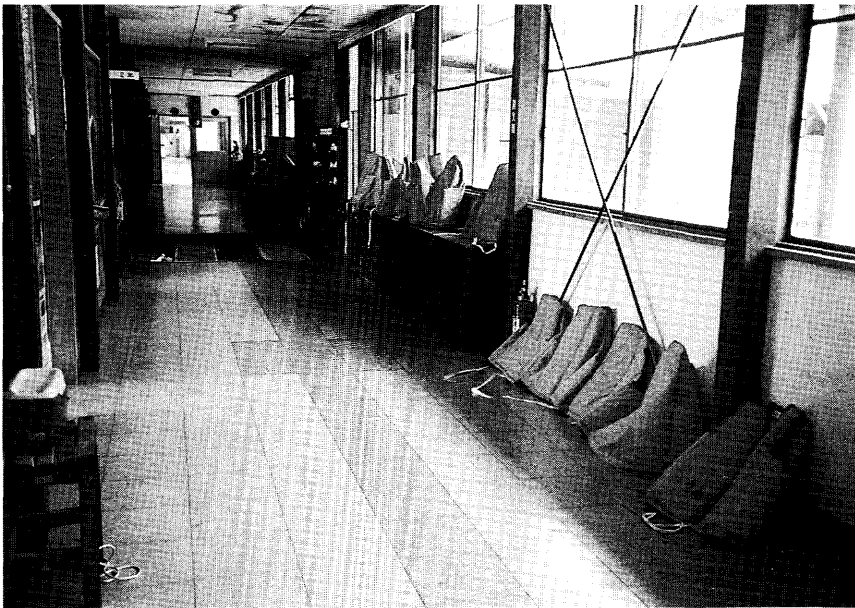


写真2 校舎内には至るところに「島」らしい授業道具が置かれている。

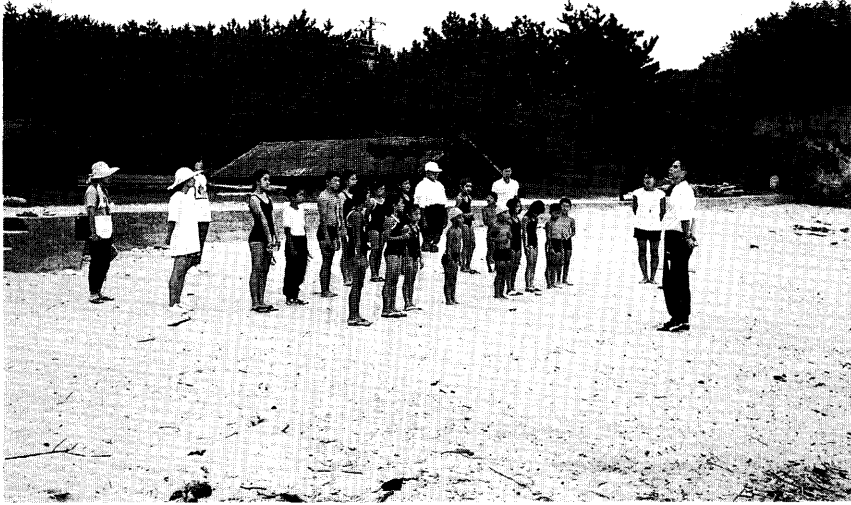


写真3 全生徒、全教員そろっての夏休み明けの水泳検定

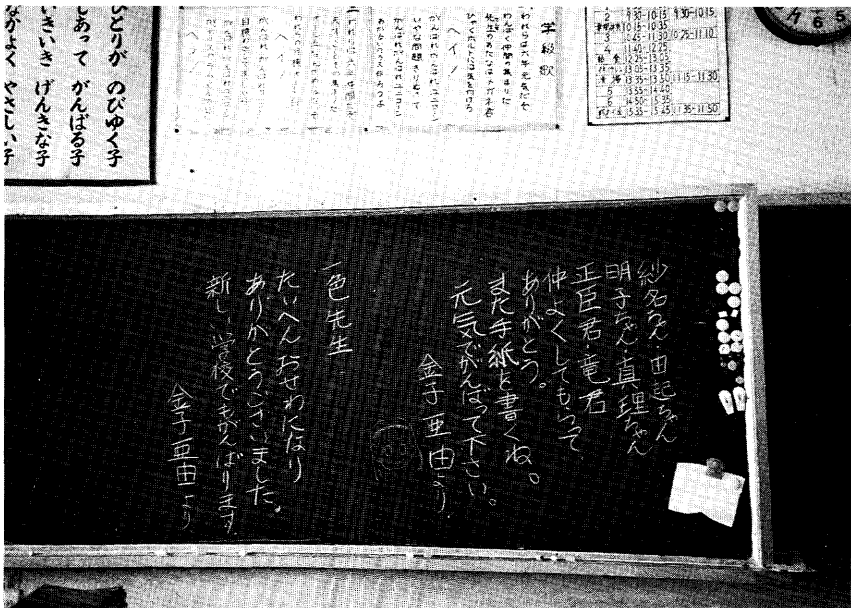


写真4 留学生活での体験，人間関係は生涯の財産になろう。

使いません。卒業生はよく家族連れで遊びに来たりして付き合いを続けています。

今後の課題は多くありますが、忘れてはいけない事は、地元主体であるということでしょう。いわゆる留学生だけをもてはやして、地元の子供の活力が死んでしまったり、良さがなくなったり、留学生パワーに負けてしまっただけでは意味がない。そのために地元生と留学生の人数は出来るだけ同じ程度が望ましいでしょう。しかしどうしても高学年中心に留学生が集まるから、街の流儀が主導権を握ってしまっているようです。地元の下級生のメリットをひき出してくれるような関係が望ましいのですが、また里親も年々かなり高齢になって、後継者確保も難しいし、センター方式(寮)と里親方式と併用していく形も検討する必要があるでしょう。ただセンター方式では、子供達がこの島の中で生活しているということをあまり実感できないでしょうね。でも島の住民は、既に発足してから6年過ち毎年々、今年はどうな子供が来るのか楽しみにしています。家族のネットワークが広がる訳ですから、地域の活性化にももちろん結びついているでしょう」

d) 学校

「高齢者は、子供の笑い声や話し声や登下校の姿を見ると心がなごむ、島が明るくなるをよく言います。地元生も喜んでます。自分達だけでは遊びも、人数が少なくて出来ないから。この小学校独自のものが無いとだめですね。都会と同じだったら子供を引きつけることが難しい。やはり海を使っての島巡り、貝取り・海草取り、天草を取ってところ天を皆で作ることもあります。ポート、カヌー、魚釣りなど都会では出来ないことをやると楽しそう。ここでは、一人一人の生徒の活躍の場が確保されていて、少人数を活かした授業ができるんです。今、心の教育が強く求められています。いろいろな体験を通して、たくましい体、強靱な精神、優しい心を育ててあげたい。ここでは特に奉仕活動にも力を入れています。空缶拾いや島内清掃、老人訪問などです。」

「留学生の方が、意見をハキハキ述べるし、発表力に関しては島の子供と違う。島の子供の方が、とても純朴で素直なだけで殻にとじこもりやすいし、人見知りする。しかし都会の子供達の活発さに引張られて、積極性が出てきたように思う。逆に、島巡りなどをして、都会の子供には分からない事、例えば植物や昆虫の名前等、地元生から教えさせることもしています。とても楽しそうに留学生に教えています。

ここでは皆名前前で呼び合います。島の生活自体が、名字ではなく名前だから。その方が親しみやすいし、

先生も生徒も島の住民も皆仲良しという感じですよ。」

(3) 今後の検討課題

まず、①留学児童の永続的確保が挙げられよう。PR活動としてマスコミによるところが主となるが、里親による読者欄への投稿もあったという。また留学体験者、その保護者のロコミによるPRも考えられるが、この場合は、いかに留学体験が素晴らしく、その児童の今後の成長段階において効果をもたらすものであるかの認識度によるところが大きい。島全体の前向きな取り組み方が問われるところであろう。しかしその反面、確かに地元児童は留学生の刺激を受け、積極性や競争意識が見られるようになったが、都会の価値観、生活様式、流儀が先行し、島の子供達の素朴さ、素直さ、真面目さといった良さを奪っては意味がないとし人数的バランスを充分に考慮すべきであろうという指摘もなる。

②里親の開拓、確保。里親の高齢化により、その後継者の確保が重要課題となる。町からの補助費は通信費程度しかなく、里親へは保護者からの委託料(食費を含む)のみであり、経済的バックアップはない。将来的には里親会とセンター方式(寮制)との併用も検討する必要があるとのことだった。

しかし、このような試みは、留学生にとっては、様々な自然活動、島の文化に触れるという実に広範な体験をすることになり、地元生にとっては新しい情報と新鮮な刺激を得られ、地域の活性化に深く関わっていることは確実であり、都会と島との「交流学习事業」として推進されるべきであろう。

「子供みこし」祭の復活が、この地域に極めて大きな振興効果を与えたことは大切な点であろう。また、里親からは「親には言えない、言いたくない事も、私達には話し発散しているところも見られる。」という感想もみられ、親元から離れ生活することが、親離れ、子離れを促すことになり、親と子が互いに自身・相手を見直し、新たな家族関係を構築する機会を持ち得るという留学制度の利点も指摘できよう。地域とのコミュニケーションを持ち、また子供達が自然から生活の基本を学ぶ機会としても、更に自分で缶拾い、海岸を清掃することで、環境保護の意味を認識する場としても、その意義は大きいものであろう。

4. おわりに

元来、離島は自ら抱える「環海性」「狭小性」「隔絶性」といったハンディ要因から、都会に比べて「後進性」を島内外ともに認めざるを得なかった。しかし離島は都会にはないポテンシャルティが多く認められ

る豊かな資源をもつ「生活」の場である。特に、自然再認識の時代においては、私達は従来とは質的に異なる価値への転換、すなわち集積密度の低い「ない」がもたらす新たな価値と可能性への追求が、より必要となってこよう。魅力ある交流や振興対策の方法は、「島」のハンディを180°捉え方を転換し、むしろ逆手に取り、それを島の特性、個性と捉え、魅力アップにどう結びつけていけるか、「その島らしさ」をいかに活かし得るかという点に関わってくる。

野忽那島が試みた「瀬戸内シーサイド留学」の、創意工夫されたカリキュラム、地域との連携による実行委員会の機能、里親制度といった特色は、今後の離島における学校教育存続を願う地域に必らずや、大きな布石となろう。

今日、多くの離島が過疎化・高齢化の深刻な問題を抱え、島おこし、地域おこしといった地域内部からの前向きな取り組みが求められている。しかし、島のどういうところに自分達は魅力を持ち、この島でどのように自分達は生活していきたいかという、確固たる島住民としてのアイデンティティ（在島意識）を形成するには、どれほど自分の「生活」する島の資源、魅力を認識できているかによろう。「島」型教育を考えるときその軸には、地域の歴史、芸術、芸能、言い伝え、方言、ことわざ、信仰、習慣等に至るまでの「郷

土学習」を位置付ける必要を強く思う。「島内に存続することによって、地域の実情に根ざした教育が実践され、地域のなかで、文化の拠点たる役割が発揮されなければならない」ということであろうか。

またシーサイドの某教員から、「地元生は、都会の子供達と一緒に、島らしい授業を授けるなかで、自分達の方が優位に立てる分野が沢山存在することを気付くようだ」と聴かされた。島外からの情報を得ることによって自分の島をより認識できることも多いということだ。平成5年現在では、島を舞台とした留学制度は野忽那島のみであったが、今後多くの島で、都会の子供と島の子供が交流し合える機会をもち得ることを望みたい。

参考文献

- 1) 全国離島振興協会『離島振興三十年史（上巻）』1989
- 2) 大串行雄・河野祥宣・中越信和・延廣光彦・後藤昇・大原武正・山田知子・丁野朗・井口佳子『過疎・長寿高齢化が進む島しょ部の町づくり』『日本列島・21世紀への構図』pp. 172-181.
シンクタンク瀬戸内総合研究機構
- 3) 米山俊直『過疎社会』NHKブックス, 1980
(受理 平成7年10月31日)

Abstract

A Study of the School Education in the Island

Tomoko YAMADA*

Since the late 1960s, the "family" and "community" have been influenced by advanced industrialization. That is (1) the labor forces moved into urban industries from rural areas, (2) the stem-families in rural household have been diversifying its individuality and (3) thus the population (especially the younger generation) of remote rural areas has been decreasing and at the same time the problem of school education in islands has become very great and serious.

In this paper, the author reports one unique model case of "Seaside-study-abroad" in Ehime Nogutsuna laland which started in 1986.

Finally the author should like to say that it is more necessary to study and love one's province land

(Received October 31, 1995)